

国語

A日程

正答率

問 題	三										
	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11
正答率 (%)	52	56	69	35	41	52	32	13	37	38	61

*三の8は得点率で表記しています。

解 説

三 小説

出典は、あさのあつこ『フラワーヘブン』。

「ぼく」（「樹」）の幼なじみ「美鈴」は、高2の春に母親を亡くし、母親代わりとして家族の世話をしながら、看護師になるための勉強をしている。「美鈴」の母親の四十九日の法要の翌日、「ぼく」は、「美鈴」との会話の中で、孝行者と称賛される「美鈴」の意外な本音に直面する。

- 問1 「弟や父親のために～進学を諦め」「勉強の傍ら家族の世話もしている」美鈴を周囲は手放して賞賛しているが、その言葉に対して「気持ち悪い」と感じる気持ちである。周囲に家族の世話の助けを求めているとは文中にないため、ウの「手を貸してくれない大人たちに、うんざり」は間違い。また、美鈴自身は自分の行為を周囲から賞賛されるべき行為とは感じておらず、むしろ「吉谷家の暴君」とも自分で表現しているように、自分の行為に複雑なマイナスの感情を持っている。アの「うれしいと感じながらも少し恥ずかしく」、エの「自分が当然だと考えている行動」はこの点からおかしい。
- 問2 問いの指示は「樹」が「達彦」を評する言葉を聞いている。傍線部の他には本文中に1カ所しかないのをそこを抜き出して答える。
- 問3 「三差路（三叉路）」は、3本の道路が集まる交差点である。樹と美鈴は2人で一緒に歩きながらこの三差路で分かれ、「それっきりだった」とある。正答であるエ以外は、2人についての内容ではないためエを選ぶ。
- 問4 「とりとめのない」の「とりとめ（取り留め）」とは、話の結論やまとまりのことである。「あの人の話にはとりとめがない」などと使う場合は、否定的な意味で使われるが、「とりとめのない話」のように使う場合は、「特に重要ではない単なる話」の意味で用いられる。
- 問5 直前に、「支配欲の強い」母が病気になり、「自由になれた気がした」とある。そして、そう思うってしまうことに心苦しさを感じていたために母に対し優しくふるまっていたとあるので、ここでの気持ちは申し訳なく感じている気持ちを選ぶ。
- 問6 「うん」と頷いたことは肯定的ではあるが、樹は「我ながら間抜けな反応」と思ったとあることから、何かを意図して行った行為ではないと読み取れる。美鈴の告白内容は樹には思いもよらないものであり、また、普段のようにとりとめのないものではなかったものであるために、どう反応していいかわからず戸惑っている様子がかがえる。ア・イ・エの選択肢はすべて樹の意図的な行為となっている。
- 問7 「これもまた間抜けな一言かもしれないが」と直前にあるが、ここでは問6の時とは違い、樹は積極的に美鈴の話に入っていきようとしている。美鈴は自分を酷いやつだと言っているが、樹はその時の心細げな様子を感じ取り、友人として何か言ってあげなければならない気持ちになっている。イを選ぶ答えが目立ったが、イでは、美鈴の行為を美鈴の言葉通りに受け取って、酷いことだと思っていることとなり、不適当。
- 問8 美鈴は、母親の持つ何でも自分の思うようにしたいという性格を嫌っていたが、美鈴も父や弟から感謝される度に、自分にも母親と同じように悪意や憎悪や支配欲があることを感じてしまっていた。彼女は、そのことから目をそらさず、しっかりと受け止めようとはしているものの、世間が美鈴を賞賛するたびに、かえってそのことを突きつけられているように気になっているのである。
- 問9 今まで普通に会話していた美鈴が、足を止め、ぼくを見上げ、瞬きせずに見つめた動作から、美鈴の心情を考え

る。イの「驚きのあまりからだがかわばった」では、見上げるという動作と合わない。また、美鈴の「酷いでしょ」に対する返答として、「勇敢だと思う」は美鈴にとって意外な言葉ではあるが、ウの「いらだちを感じた」では、その後に美鈴が樹の言葉の続きを待っているところから外すことができる。美鈴は自分の中にある悪意などをしっかりと見据えており、弱音を吐いているわけではないことからエは不正解。

問 10 中学の時に美鈴は「淋しい大人になりたくない」と話をしていたが、樹は今の美鈴を見て、美鈴なら大丈夫だと感じている。樹が、美鈴なら「自分のさびしさをちゃんと受け止められる」と思ったのは、自分の心の中にある悪意や憎悪などをしっかりと見据えている姿を見ているからである。

問 11 緊張状態から力が抜けた場面である。直後にある「いつもはもたもたして、的外れなことばかり言っているのに、ぽんとかっこの急所突く」の言葉から考える。